

地域と作る演劇の意義 -多文化共生に向けて-

Gehrtz 三隅友子 (徳島大学)

仙石桂子 (四国学院大学)

本発表は演劇を中心としたパフォーマンスを最終プロダクトとするプロジェクトワークによる教育実践をもとにしている。プロジェクトワークは①教室と現実の世界をつなぐ②特学習者がより主体的に関わる③体験的な異文化接触を起こすという三つの特徴を持つ教育の手法である。

発表者は2007年から2019年の間に計10回脇町劇場オデオン座(徳島県美馬市にある昭和8年/1933年に建てられた木造の劇場)にて、地域の様々な人たちと留学生が協力する演劇活動を行ってきた。

演劇を通して当初の日本語教育としてのねらい以外に様々な意義が浮かび上がってきた。それは①留学生が日本語と日本文化を学ぶこと ②日本人が留学生と活動をすることによって異文化理解を進めること、さらに③オデオン座のような古い地域の文化財を守り残すことへの働きかけをすることであったが、時間と資金調達の変化に連れて関わる人の変化も明らかになった。当初の3年は民間の留学生の交流事業⇒さらに2013-15年は文部科学省の留学生交流拠点整備事業⇒2017年～現在は文化庁の「『生活者としての外国人』のための日本語教育事業」の助成を受けてきたが、2019年には地域の在住外国人との多文化共生のイベントとしての意義が特に強調されている。ここでは演劇の持つ力強いメッセージ性が活かされている。

また上演内容の変化では宮沢賢治の作品を徳島の方言に直したものから、人権をテーマにした「島ひきおに」、2019年度は徳島のこの地域の実話「十六地蔵物語 一集団疎開中の火災で亡くなった児童一」となり、出演者も留学生と日本人学生らではなく在住外国人を含む多文化共生を考えるクラブのメンバーの参加が可能となった。さらに観客も地域の高校生を対象とし、多文化共生の意義と文化財保護の観点の教育的役割をもつこと等、演劇の持つ力を本プロジェクトの歩みを概観し確認することを通して、さらなる意義を唱えたい。